

■ ユーロ/ドルは年末に向けロング勢がポジション整理へ？

ついに師走に突入し、外国為替市場では年末に向けた様々な思惑が蠢いている。大きな流れの一つは、年末に向けた投資家のポジション調整で、それは基本的にドルのショートカバーが主となっている模様である。ことに、ユーロ/ドルにおいては年初から9月初旬まで一貫して大幅なユーロ高が続き、一旦反落して11月初旬あたりまで調整を交えたものの、11月下旬にかけては再び強く買い戻される展開となった。よって、これから年末に向けてはユーロ/ドルのロング勢によるポジション整理が進む可能性もあるものと見られる。

確かに、ユーロ圏の域内景気はドイツを中心として堅調な状態を続けており、11/14に欧州連合（EU）統計局が発表した7-9月期のGDP（改定値）は前年比2.5%増と、まずまずの結果ではあった。ちなみに、本日（7日）は「確報値」が発表される予定となっており、市場予想では改定値から変わりがないと見られている。

とはいえ、10/26に行われたECB理事会後の会見でドラギ総裁は「コアインフレはまだ上昇トレンドを確認させず」、「大規模な刺激策が引き続き必要」などと述べており、来年9月まで期間が延長された債券購入（=QE）については「QE期限をオープンエンドにすることを大多数が支持」、「（債券購入の）減額はテーパリングではない」などと述べ、QE終了への思惑を強める市場に対してわざわざ釘を刺そうとしたことも忘れてはならないだろう。

おまけに、ドラギ総裁はこの日「成長への下方リスクには為替相場が含まれる」ということにまであえて言及している。無用なユーロ高が及ぼす景気への影響が看過できないものであることを、かねてよりドラギ総裁は相当に強く危惧している模様であり、今後もいたずらに市場をユーロ高へとなびかせるような言動は厳に慎むものと思われる。

下図を見てもわかるとおり、そもそもユーロ/ドルは超長期的な下降チャネルを形成しながら基本的に下降トレンドを辿っている。今年9月には一時1.2093ドルまで上値を伸ばす場面があったものの、さすがに1.2000ドル処から一段の上値を上げて行くというのは、かなり厳しいと見られる。それは、2015年1月にECBは量的緩和実施の決定を下すまでユーロ/ドルの下値を支えていた1.1800-1.2000ドルあたりの水準が重要な節目として意識され、2015年3月にかけて同水準を下抜けてからは、それが強力な上値抵抗となっているからでもある。



なお、このところはずっと62カ月線を強い上値抵抗として意識しながら、一目均衡表の月足「雲」下限の水準と交錯するような展開を続けている。自ずと戻りは限られる状況にあって、なおもドイツの連立協議の行方が不透明なことや、場合によっては年内に米税制改革法案が成立する可能性もあることなど、ユーロ安・ドル高の要素が少なからずあることも考えると、安易に上攻めするわけにも行かないというのが正直なところである。 (12月07日 12:45)